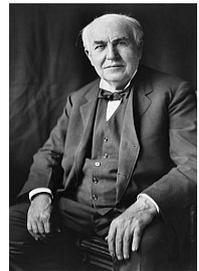


## I. 導入

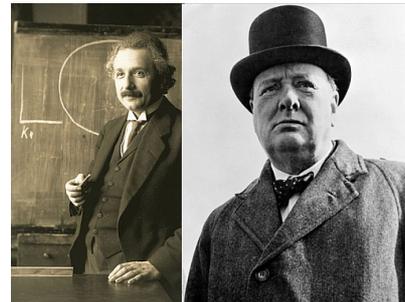
おはようございます。今日、機会ということについてお話したいと思います。人は機会を好み、良い機会に恵まれた人にはおめでとうと言います。若い人が大学院に入ったり、海外に行くチャンスを得たり、または友人が職場で昇進したりすると、「おめでとう、いいチャンスだね」と言います。



機会というのは運に左右されると思われがちですが、実はそれ以上のことです。発明家トーマス・エジソンは、蓄音機や映写機、電球の発明で知られています。彼によると、自身の功績はすべて努力の賜物だと言います。エジソンは、機会についてこう言いました。「ほとんどの人がチャンスを逃す理由は、チャンスは作業着を着て、大変そうに見えるからだ。」



アルバート・アインシュタインは、「苦境の中にチャンスがある」と言いました。何か問題があるところに、チャンスもあることが多いというわけです。イギリスの政治家ウィンストン・チャーチルも、似たようなことを言っています。「楽天家は、困難の中にチャンスを見出す。悲観論者は、チャンスの中に困難を見る。」



ここで共通するのは、機会は容易にやってくるわけではないということです。単なる運やめぐり合わせではありません。多大な努力や困難の中に見出すものです。

ここで、クリスチャンとして証するチャンスについての名言を紹介します。ここに挙げる人たちは著名人ではありませんが、その言葉には重みがあります。サリー・コッチはこう語ります。「人を助ける大チャンスはあまりないが、小さなチャンスならいつも身近にある。」R・ファルコンはこう言いました。「毎日が、この世にイエスを示す新しいチャンスだ。」

救い主はただひとり、私たちの主イエス・キリストです。私たちがイエスを信じると、主が私たちの心に来て住まわれます。つまり、私たちがイエスの御名で人に愛をもって仕えるとき、私たちがその人たちにとってのキリストと言えるのです。キリストは私たちのうちに住まれ、聖霊によって私たちを導かれます。ですから、どんな状況でも、自分の言動をもってイエスの証人となる機会を見出すことができます。

パウロも、ガラテヤ2:20を書いたとき、同じようなことを考えていたのでしょうか。「生き

ているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」キリストが私たちのうちに生きておられるのです。アーメンでしょうか。アーメンですね。

今日のメッセージは、使徒言行録シリーズの65回目のメッセージで、今日で使徒言行録の最後まで行きます。来週は、使徒言行録シリーズの総括をしたいと思います。先週のメッセージの終わりで、パウロはようやくローマにたどり着きました。パウロが未だ囚人であるのは、皇帝への上訴についての審議を待っているからでした。パウロは、番兵をひとり付けられましたが、借家で住むことを許されました。では、使徒28:17-31を読んで、この状況でパウロがどのような機会を見つけたか見てみましょう。



## II. 聖書朗読(使徒言行録28:17-31、新共同訳)

28:17 三日の後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いた。彼らが集まって来たとき、こう言った。「兄弟たち、わたしは、民に対しても先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に引き渡されてしまいました。 28:18 ローマ人はわたしを取り調べたのですが、死刑に相当する理由が何もなかったのです。釈放しようと思ったのです。 28:19 しかし、ユダヤ人たちが反対したので、わたしは皇帝に上訴せざるをえませんでした。これは、決して同胞を告発するためではありません。 28:20 だからこそ、お会いして話し合いたいと、あなたがたにお願いしたのです。イスラエルが希望していることのために、わたしはこのように鎖でつながれているのです。」 28:21 すると、ユダヤ人たちが言った。「私どもは、あなたのことについてユダヤから何の書面も受け取ってはおりませんし、また、ここに来た兄弟のだれ一人として、あなたについて何か悪いことを報告したことも、話したこともありませんでした。 28:22 あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい。この分派については、至るところで反対があることを耳にしているのです。」

28:23 そこで、ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来た。パウロは、朝から晩まで説明を続けた。神の国について力強く証しし、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得しようとしたのである。 28:24 ある者はパウロの言うことを受け入れたが、他の者は信じようとはしなかった。 28:25 彼らが互いに意見が一致しないまま、立ち去ろうとしたとき、パウロはひと言次のように言った。「聖霊は、預言者イザヤを通して、実に正しくあなたがたの先祖に、 28:26 語られました。『この民のところへ行行って言え。あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。 28:27 この民の心は鈍り、／耳は遠くなり、／目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、／耳で聞くことなく、／心で理解せず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。』 28:28 だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」 28:29 (†底本に節が欠落 異本訳) パウロがこのようなことを語ったところ、ユダヤ人たちは

大いに論じ合いながら帰って行った。

28:30 パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、28:31 全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。

### III. 教え

使徒言行録は、31節で締めくくられています。「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」囚人にされて、裁きを待つ身となれば、口をつぐんでイエスのことを語らなくなる人も多いでしょう。後のことがはっきりするまでは、トラブルを起こさないように静かにしていようとするのが楽な決断です。



しかし、パウロはそうではありませんでした。パウロは、置かれた状況で新しい機会を見出しました。ローマ到着からたった三日後、ユダヤ人指導者たちを招いてイエスのことを話しました。信じる人もいれば、受け入れない人もいました。同胞ユダヤ人の間に何の進展も望めなくなると、パウロは異邦人にイエスの福音を語り始めました。このころに、パウロはエフェソ、コロサイ、フィリピ、フィレモンへの手紙を書きました。

自宅軟禁中、パウロには常に少なくともひとりとは聴衆がいました。というのも、そこには必ず番兵がいたからです。歴史家によると、番兵は4時間ごとの交代制だったといいます。つまり、パウロは二年間で、数多くの番兵にイエスのことを話す機会を得たと言えます。

ローマ帝国の囚人であることは、パウロにとって福音を告げ知らせる使命を遂行する邪魔にはなりません。むしろ新しい機会ととらえ、フィリピ1:12-14でこう記しました。「1:12 兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。1:13 つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、1:14 主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。」

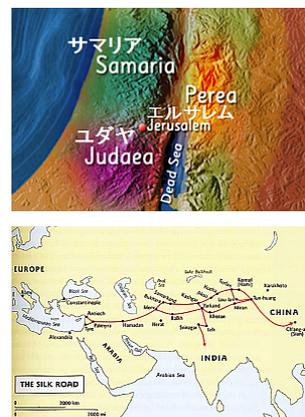
パウロのように優れた指導者が長期間にわたって捕らえられたことで、教会はそのことを恥じ入り、弱気になってもしかたのない状況でした。しかし、働きを続けるパウロの勇姿を見て、人々は今まで以上に恐れず勇敢になろうと励まされました。同時に、番兵をとおして、イエスの福音は皇帝の宮殿をはじめローマ全体に浸透しました。ローマ人への手紙からわかるように、ローマにはパウロが来る前からすでにしっかりとした教会がありましたが、その教会はさらに強められました。福音は、ローマ帝国の隅々まで及ぶことが可能になったのです。

「すべての道はローマに通ず」ということわざがあります。これはローマ帝国について語ったものですが、ローマ帝国は主要都市を結ぶ街道を作ったことで有名です。要所に置かれた標石には、ローマまでの距離が刻まれていました。紀元前20年、アウグスト帝は金の標石をローマに建て



ました。これは、帝国内の全街道の終点を示すものです。

しかし、すべての道がローマに通じているなら、すべての道はローマからどこかにも通じているわけです。兵士や商人、職人、奴隷、伝道者をとおして、福音はまたたく間にローマからすべての道へと広まりました。数年後、クリスチャンに対する激しい迫害がローマで起こり、福音はますます広まりました。



皆さん、使徒8:1を覚えていますか。これは、ステファノが殉教したときの様子です。そのころ、パウロはまだ迫害者サウロでした。「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。」

迫害者たちは、教会を撲滅できると考えていました。ところが実際には、その正反対のことが起こりました。使徒8:4にその理由が書いてあります。「他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。」アンティオキアに行った者もいました。そこは、弟子たちが初めてクリスチャンと呼ばれた場所です。アンティオキアでは、宣教師を送り出す非常に活発な教会が育ちました。パウロとバルナバは、西へと送り出されました。シルクロード沿いに東方へと送られた宣教師もいました。彼らはやがてインドや中国まで行きました。教会を迫害する動きは結果的に、イエスの福音が遠方に広まる後押しとなりました。

今日の聖書箇所に戻しましょう。パウロはキリストを告げ知らせたことで囚人となりました。使徒28:20で、彼は集まったユダヤ人指導者にこう言いました。「このようなわけで、私は、あなたがたに会ってお話ししようと思ひ、お招きしました。私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです。」ここにある「イスラエルの望み」というフレーズはエレミヤ書の引用です。エレミヤ書17:13-14を見てみましょう。「17:13 イスラエルの望みである【主】よ。あなたを捨てる者は、みな恥を見ます。『わたしから離れ去る者は、地にその名がしるされる。いのちの水の泉、【主】を捨てたからだ。』17:14 私をいやしてください。【主】よ。そうすれば、私はいえましょう。私をお救いください。そうすれば、私は救われます。あなたこそ、私の賛美だからです。」

パウロは、イエスが主であり救い主であると教えました。イスラエルの望みのために鎖につながれていると言うことで、イエスが救い主であるだけでなく、肉をまとって来られた主ご自身であると宣言したわけです。この一節は、イエスが差し出してくださる救いを拒む人がいるという残念な事実も示します。恥を見る人はいるでしょう。一方、主の名を呼び求める人は、癒しと救いを得て、主を称えるでしょう。

パウロはさりげなくエレミヤ書を引用しましたが、聖書を知る人々には十分明らかだったはずですが、パウロはここで終わりません。彼は次にイザヤ書6:9-10を引用し、厳重な警告を発します。使徒28:26はその引用の前半です。「この民のところに行って、告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。」電車が頻繁に通る

線路脇に住んでいると、その騒音が次第に気にならなくなります。同じように、多くのユダヤ人は神のみことばを聞くことにあまりに慣れすぎて、心にも思考にも響かなくなってしまったようです。彼らの耳と目は、イエスの福音に対して閉ざされていました。

**使徒28:28**で、パウロはついにこう言いました。「**ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。**」パウロが宣言したとおり、異邦人はユダヤ人よりも真剣に救いの福音に耳を傾けました。とは言え、すべての人がイエスを受け入れるわけではありません。主はそう望んでおられますが(1 Timothy テモテ第一**2:3-4**)、そうならないのです。

パウロがコリント第二**2:15-16**で語った真理は、なかなか理解するのが難しい箇所です。「**2:15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。 2:16 ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。**」イエスを告げ知らせるのは喜びであり、同時にとても責任の重い役割です。福音を聞く機会を得た人には、それに応答する責任が生まれます。神の恵みを拒み続ける人には、裁きが待っています。だからと言って、それでくじけてはいけません。福音を聞いた中に、信じて救われる人が必ずいるとわかっているからです。

**使徒28:30**「**こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、**」パウロは長年、方々を旅してイエスを告げ知らせました。このとき、パウロは鎖でつながれていましたが、来客を迎える自由は与えられていました。そこで、パウロのところに多くの人々が訪ねて来て、イエスについての話を聞きました。私たちの場合も、あちこち旅しているか、いつも地元にいるかは重要なことではありません。一番大切なのは、機会が与えられればいつでもイエスの名を知らせ、主の愛で人々を愛する備えができていますかです。

サンパウロ・アラレゴラ教会は、パウロの借家があったとされる場所に建っています。非常に美しい教会で、今も健在です。教会正面の壁には、パウロの人生を描いた壁画があります。



使徒言行録は、波乱万丈の内容です。最後まで読んで、その続きを知りたくなります。パウロは皇帝の前に出廷してどうなったのでしょうか。皇帝にもイエスの福音を伝えたのでしょうか。はっきりはわかりませんが、伝承によると、皇帝と謁見した後、パウロは釈放されたということです。これは使徒言行録には記録されていません。なぜでしょう。

ルカと使徒言行録の最初にその手掛かりがあるのではないのでしょうか。このふたつは、テオピロに宛てられていました。テオピロとは、「神の友」という意味です。これは書き出しの句だった可能性もありますが、おそらく人の名前でしょう。テオピロがどのような人だったかはわかり

ませんが、パウロの裁判に関わったローマ帝国の役人だったと考える人もいます。もしそうであれば、使徒言行録の終わり方が唐突なのも説明がつきます。ルカと使徒言行録が、皇帝の前にパウロが出廷した際に弁護する証拠として提出されたのであれば、使徒言行録の内容が法廷の始まる前までで終わっているのも当然です。

使徒言行録の後、パウロはどうなったのでしょうか。皇帝の前に出廷し、無実が証明されて釈放されたと、多くの学者たちは考えます。その後も数年、パウロは働きを続けたでしょう。ローマ15:24に記されたように、スペインまで旅したかもしれません。しかし、伝承によると、ローマの大火災について皇帝ネロがクリスチャンに責任をかぶせ、クリスチャン迫害が始まると、パウロとペトロはローマで投獄され、ついには殉教したといわれます。サンパウロ・アラレゴラ教会にある、向かって右側の壁画に注目してください。ここには、斬首刑に処せられる直前のパウロが描かれています。

サンパウロ・アレ・トレフォンターネ修道院は、パウロが殉教したとされる場所にあります。パウロは殉教しましたが、生前、数多くの人々の人生に大きなインパクトを与えました。今もなお、パウロの手紙が人々を信仰に導きます。想像してみてください。パウロの働き



をとおしてイエスに導かれた無数の人々と天国で出会うパウロの姿を。彼の証をとおして信仰をもった人々に挨拶するだけで、きっと永遠の半分を費やす必要があるのではないのでしょうか。

#### IV. 結び

ダマスコへの途上でイエスと出会って以来、パウロは復活の主について人々に伝える機会を最大限に活かしました。私たちもパウロの模範に倣って、与えられた機会を活かしましょう。それは、容易なことではありません。たいへんなこともあるでしょう。かなりの努力が求められます。しかし、誰にもイエスについて語る機会を与えられます。イエスの愛を分かち合い、イエスの名によって仕える機会が与えられています。

最後にコロサイ4:3-5を読んで終わりにしましょう。「4:3 同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。4:4 また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。4:5 外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。」

#### V. 祈り